

郷土室だより

第95号

平成9年3月21日

編集・発行

東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地1-1-1

電話 3543-9025

刊行物登録番号 08-035

中央区の「橋」

(その5)

◇素材としての槇

前号で「槇」について、簡単に取りあげたのですが、意外に多くの反響がありました。その中には建築家からのものもあって、現在の建築家は「素材」にこだわることが少なくなりました。

図面のある箇所に「素材」名を指定すれば、それで済んでしまう。建築の規模にかかわらず、すべての「素材」が工業規格による工業製品化している現在、それで十分に通用するのだが、もっと「素材」そのものについての知識を持つことが必要なのではないか……

といった意味の感想が二、三にとどまらず寄せられました。そうした面がかねてから、つねづね建築と「素材」のあり方に注目を払われてきた鬼頭日出雄氏が、「槇」の記事を縁に、わざわざ明治十年（一八七六）の『工業新報』の原稿（投書分）を見せてくださいましたので、中央区の「槇」とその産業分布と関連させて引用することにします。

鬼頭氏は改めて紹介するまでもなく、



「東京実測全図」(内務省地理局 明治20年)より

A = 東湊町 B = 霊岸鳴銀町 C = 今の永代橋の位置

現在のわが国の煉瓦とその施工技術に関する蓄積では第一人者として知られている方です。

◇鹿兒島の槨

引用した記事は『工業新報』の第二号に槨のことが記事になり、その記事に対して二人の読者がつぎのような投稿したもので、始めの分は栗田萬次郎という人の投稿でした。

中央区ではなく西南日本における槨という基本的な素材についての見聞ですが、あえて引用しました。

府下千住大橋の橋杭ハ槨の木にて二百年の久しきを経て尚朽腐せず。

此材真に貴重すべく又現今産出に乏しく且つ確証の有無等疑問を挙げて世間に問れしゆへ今取あへず余が見聞せしことをあげて之を左にしるし尚貴社諸彦の考按を仰がんとす。

吾去る明治八年五月、欽命を奉じて琉球国に航し（中略）一日首里の王城に至り宮殿園庭など見物（中略）王宮の建築に用

ふる材木ハ尽く薩州鹿兒嶋并に屋久嶋等より運搬さるものなるよし（中略）其用材の佳絶なること言んが事なし（中略）宮殿の造構百年以上をすぎこゆると見えけるか椽側土台なんとすこしも朽腐せる痕だに見えず

琉球人富川親方に晤す談たまたま木材のことに及べり 彼人の話に「チアギ」（即槨の木の方言）ハ二三百を経るも尚朽腐せざる故に「ヨキナワ」にてハ甚だ此木を貴重すと（中略）

按ずるに羅漢松邦名「マキ、イヌマキ、ヒトツバ」（鹿兒嶋）「チアギ」（琉球）ハ皇邦西南山谷及山陽山陰等諸州に出つ西洋植物家ハ「ポドカルプス、マコイ」と名づけ之を水松（アラウカ）の属に収む 此種多種あり竹柏（ポドカルプスナキ）も亦其一種に係る（以下植物学的な記述が続きますので省略します）

◇やまとふみの投書

栗田氏の投書のほかに柳という人からも投書が寄せられています。

おのれ薩摩の旅に山川といふに泊りぬ 家作なんと こよなふ ひなびたるがうちに柱どものいとふるびたると、椽板なんとの垢つきたるが木の樓こまやかにして見なれめ木振になん侍りける、あるじをよびて尋ねければ、一葉（ヒトツバ）となん申し侍て、七八十年ある八百とせも朽侍らぬ

木なりとて、ほごらかにかたりけり、行々て琉球にいたりぬ、おなし木どももて、殿作り侍りける 軒の多く侍りければ、また尋ねけるに羅漢杉とぞいらふ。おのれ、かの樹見まほしく尋ねありきけるに、これなん羅漢杉と申といふを見れハ槨なりけり

和名抄二百四十八 椽名作 柱埋之能不腐者也 秘伝花鏡 潤瓣厚葉者 羅漢松也其實礫碩修聳節： 歷千年而不頽 大和本草 西国ニハ「クサマキ」と云フ 其臭クサケレハナリ……木曾山ヨリ出

ル

按スルニ琉球ニテ羅漢杉と云ハ「ラカン」松ノ誤ナルヘシ

いずれも旅行者の観察の報告といえますが、このような素材への興味と関心を誰でもが持っていた時代が、つい先き頃まであったことが思い出されます。

◇深川大橋から新大橋

元禄六年（一六九三）つまり家康が江戸に来てから百三年目に、隅田川ならぬ「浅草川」に両国橋について二番目の橋の「深川大橋」がかけられました。

この「深川大橋」の位置は当時の「住居表示」でいうと中央区側は「浜町水戸殿上ヶ地」つまり架橋工事のために水戸家の下屋敷を幕府が接収した所（現在の浜町3-44、都の下水道局浜町第二ポンプ所の東南の地先）と、

江東区側は「深川元町」（現在の常盤町1-6、芭蕉記念館の南側の泰晴倉庫運輸株式会社の清洲橋倉庫の敷地）の間でした。

橋の規模は「長京間百間（約一九七メートル）幅京間三間七寸（約六・一二メートル）、高欄之間百八、両袖之間九尺（約二・七二メートル）宛」というものでし

た。

経費は幕府御蔵から「御材木百七十本」のほか合計で「木数九百六拾七本」が支給され、御入用金として現金銀が「貳千三百四拾三両三分と銀拾三匁六厘」が支出されました。

工期は架橋の公示が七月十六日、架橋責任者の奉行任命が八月七日、工事入札公示が八月二十八日、請負人は東湊町一丁目の白子屋伊右衛門、證人（保証人）は霊岸島銀町の松皮屋與兵衛にきまり、「晴天八十日」の期間で請負ったのですが、実際には「五十二日」で出来て、十二月七日に渡り初めをするという早さでした。

その翌日の八日に改めて幕府は、この「深川大橋」を正式には「新大橋」と呼ぶことを告示しています。

なお請負人の白子屋伊右衛門のいた東湊町一丁目、いまの中央区新川一丁目、證人の松皮屋與兵衛のいた霊岸島銀町も、同じくいまの新川一丁目にありました。

霊岸島（いまの新川一〜二丁目）の東岸は、江戸湊における大形船千石船の泊地であり、流通

面では、樽廻船で運ばれてきた下り酒の一手引き受け場としての「新川の下り酒問屋街」が、非常に有名な存在でした。

このほか霊岸島全島はなんらかの形で、江戸湊に出入りする船舶に關係する業種で占められていました。

したがって「深川大橋」に必要な用材の多くを、幕府から支給されたといっても、そのほかの資材や労働力を準備するためには、霊岸島居住という「地の利」は、ずい分大きかっただろうと考えられます。

◇レインボーブリッジ

橋ができるまで深川大橋と呼ばれたことの理由はいくつかあります。

①は地盤の良さが挙げられます。橋がかりした深川元町（現常盤町）一帯は、隅田川左岸に形成された自然堤防の一郭です。自然堤防とは、河川が氾濫するたびにその両岸に土砂を堆積させて、付近より小高くなった場所で、常襲的な洪水には安全な場所のことです。

この自然堤防を足がかりに、深川氏をはじめとする開拓者集団が移住をかさねて定着した場所です。だから元町だったのです。

②は明暦大火（一六五七）以後、深川の開拓が進むと同時に、水都江戸湊の倉庫地区として、著しく発展しました。

③それにともなつて永代寺・富ヶ岡八幡宮をはじめ、明暦大火後に江戸からこの地に移された多くの寺院などの新旧の門前町の発達は、隅田川でへだてられた両国（武蔵国と下総国）を一体化して、「江戸臨海副都心」を形成するようになりなりました。

④さらに深川元町（常盤町）の南端に、行徳と結ぶ沿海運河小名木川がありました。現在の万年橋のところに当時の深川一之橋がかかっていました。小名木川水運の終点と江戸とを徒歩で結ぶコースが、「深川大橋」だったのです。

こうして誰もが「深川大橋」と疑わなかった橋は、開通の翌日の元禄六年（一六三九）十二月八日に、新大橋になりました。新大橋誕生は平成のレインボーブリッジを思わせませす。

◇芭蕉と新大橋

俳聖と呼ばれいまも多くの人の心から尊敬されている松尾芭蕉と深川の縁は、非常に濃いものがあります。さきにも説明したように現在の芭蕉記念館のすぐ南が、最初の新大橋の取り付け場所であったことをはじめ、深川元町をとりかこむ六間堀を中心に、芭蕉の句碑・記念物など江東区発行の「史跡をたずねて」では一五八項目のうち一八項目もさいています。

それはさておき芭蕉はこの深川元町の一面に、延宝八年（一六八〇）から、四度も火災にあいながらも断続的に住み続けています。

そしてこの新大橋の工事を晩年の彼は相当の関心で見続けていたようです。

初雪やかけかけりたる橋の上

当時は陰暦でしたから十二月初旬はいまの一月から二月の季節でした。ですからこの句は完成間際の、当時の十一月下旬から十二月月上旬にかけて間に、つくられた句とみることでもできます。

そして十二月七日の「渡り初め」の直後かと思われる句に

有がたやいたゞひて踏はしの雪

と新大橋完成を感謝している句があります。またこの句の別案として「みな出て橋をいたゞく霜路哉」という句もあつたとされています。しかし芭蕉は新大橋完成後、

一年もたない元禄七年（一六九四）十月十二日に、旅先で没しました。享年五十一歳でした。

芭蕉のいた場所は、幕末の文久二年（一八六二）の尾張屋板の江戸切絵図「本所深川絵図」には万年橋の北側の「松平遠江守下屋舗」の中に「芭蕉庵の古跡庭中二有」とあり、その北側に町人身分の住む深川元町が描かれています。

◇五十賀の橋

新大橋開通の五年目の元禄十一年三月二十五日、新大橋からわずかに一・二キロメートル下流の「深川の大渡し」の地点に、新しく橋をかけることが命令されました。

この架橋の理由は五代將軍綱吉の生母、桂昌院の発意だともいわれています。その名目はこの年は綱吉が五十歳になった年なので「御五十賀」として計画されました。当時は「人生五十年」が信長時代以来の常識でしたから、五十賀は当然なことでもあつたわけです。

なお、この橋建設と同時に平行して上野の東叡山寛永寺の根本中堂と文珠樓・二王門・山王社などが大規模に造営されて、八月二日に完成しています。

橋は七月二十八日に竣工し、翌二十九日、綱吉の寿命永代というわけで永代橋と命名され、八月朔日から寛永寺の竣工とあわせて通行が許されました。

橋の規模は長さ百十間余、幅三間一尺五寸、日本橋側は北新堀町地先（いまの豊海橋の箱崎町側の一角）箱崎町19辺、深川側は佐賀町（いまの江東区佐賀町一丁目一の南端辺）を結びました。橋の高さは大潮時の水位から一丈余というものでした。

◇あまり木余聞

この橋も例によって町人の請負で、工事が行われたのですが、その詳細は「残されていません。ただ『江戸真砂六十帖』という記録につきのような記事があります。

永代橋掛る。元は今の橋の下にて渡しぬ。常憲院様（綱吉）被 仰付出来ず。橋請負人其頃「定小屋小買物方請合 松屋市太郎・紀伊国屋吉兵衛なり。其節上野根本中堂御建立中ゆへ、右兩人請取金高は知れず申。橋出来して兩人の利分老方式千両宛取候よし。我も其悦ぶの振舞に九ツの時行ぬ。兩人今跡かたもなし。

請負人金吹町 紀伊国屋吉兵衛
同 亀井町 松屋市太郎
（活字本『燕石十種』第二の
中の「江戸真砂六十帖」巻の
三より引用、句読点などは引用者）。

余聞の二 勅額火事のこと
寛永寺の根本中堂が完成して約一か月後の九月六日、この日は中

堂に掛ける東山天皇の宸筆（天皇自筆の書のこと）の「瑠璃殿」と書いた勅額が江戸市中を寛永寺にむかつて行進している四ツ（午前十時ころ）、南鍋町（いまの銀座五丁目、晴海通りに面した箇所）から出火、四方に延焼して焼けた大名邸八三、旗本邸二二五、寺院二二二、町家一万八七〇三戸、上野・谷中を焼け抜けて千住まで燃えるという大火事になりました。世間ではこの大火を俗に「勅額火事」とか「中堂火事」と呼びました。

当時の「松陰日記」、「窓の須佐美」、「元正間記」などの記録をみますと、明暦大火の時と同じく、いくら南風が烈しくても、実に異常な燃えひろがりをしています。やはりこのクラスの大火の原因は意識的な放火によるものと思わせます。

（鈴木理生）